

平成 28 年度

第 61 回 長野県中学校連合教科研究会

保健体育科

I	研究テーマ	1
II	趣 旨	1
III	参加校テーマ一覧と参加者氏名・指導者氏名	1～2
IV	研究問題と協議内容	3～6
V	本年度研究会の反省と来年度の方向	7
VI	あとがき	8

I 研究テーマ

一人一人の生徒が自ら進んで運動に取り組み、運動の楽しさや喜びを味わうことができる体育学習や、健康の大切さを理解し実践力を育てる保健学習はどうあったらよいか ～教材化の工夫と評価計画～

II 趣旨

生徒一人一人が技能を追究していく場面と、友と協力して課題を解決していく場面の関係性を明らかにし、教材化に視点をあてて検討していきたい。また、評価計画をグループワークで検討し、学び合いの場とするとともに、各校で生かせるものを作り出していきたい。

III 参加校テーマ一覧と参加者名、指導者名

第1分科会

・指導者	東信教育事務所指導主事	清水 直人 先生
・司会者	千曲市立戸倉上山田中学校	井浦 徹 先生
・記録者	長野市立吉田小学校	野口 磨莉 先生
・世話係	信州大学教育学部附属松本中学校	有賀 浩之 先生
学校名	研究の要旨	
広陵 中学校	・個々の技能を連携としてつなげていく指導のあり方。 ・課題設定をいかに短くするか。話し合いの設け方。	中曽根佑哉
南宮 中学校	・3段攻撃を生み出すための教材の工夫。単元展開の構成はどうあったらよいか。 ・ゲームの場面、ひとつのプレイに対する生徒の反応が弱いのが悩み。	柳沢 新
信州新町 中学校	・友との関わり合い（共同的学习）の中、運動量の確保を効果的に行うにはどのように展開すればよいか。	伊藤駿太郎
高山 中学校	・自ら運動の楽しさを味わい深めていくにはどうしたらよいか。	町田 里穂
附属松本 中学校	・体育理論と実技とのかかわりを意識した単元構想を行ったが、その有効性や他の題材選択や展開方法について。 ・ターゲット型の運動は学習指導要領に示されていないが、スナックゴルフのもつ魅力や価値はどのようなところにあるか。	有賀 浩之

第2分科会

・指導者	南信教育事務所指導主事	齋藤 和久 先生
・司会者	長野市立柳町中学校	堀込 浩志 先生
・記録者	中野市立長丘小学校	濱 彰吾 先生
・世話係	信州大学教育学部附属長野中学校	中塚 洋介 先生
学校名	研究の要旨	
伊那 中学校	「かかわる・わかる・できる授業づくり」を具現化するために、やさしい教材や運動技術や戦術の可視化に視点を置いて3分セიმゴール走（2年）を行った。	本村 正伸
城南 中学校	「仲間とかかわり合いながら運動の楽しさを味わう生徒の育成」を具現化するために、運動の楽しさが味わえるやさしい教材や生徒間・生徒教師間のかかわりに視点を置いてリレー（1年）を行った。	佐藤 智洋
松川 中学校	保健学習（2年）の「傷害の防止（応急手当の意義と基本）」を扱い、心肺蘇生の知識の習得や模擬体験、模擬ドリルという流れで授業を行うことを通して、友とかかわり合いながら正しい情報を押さえたり、自らの知恵にしたりして、実際の場面を想定した「生きる力」へとつなげることができた。	大屋 草平

岡谷東部 中学校	保健学習（2年）の「傷害の防止（応急手当の意義と基本）」を扱い、心肺蘇生の知識の習得や模擬体験、模擬ドリルという流れで授業を行うことを通して、友とかかわり合いながら正しい情報を押さえたり、自らの知恵にしたりして、実際の場面を想定した「生きる力」へとつなげることができた。	大沢 創
飯田東 中学校	「一人ひとりの生徒が運動の楽しさを味わいながら技能を高めるための指導」を具現化するために、運動の特性に触れるための教材化や自己の高まりを実感できる振り返りの場面の工夫に視点を置いて、マット運動（1年）を行った。	赤羽 徹郎
附属長野 中学校	器械運動領域において集団マット（3年）を行い、演技を撮影した映像を基に話し合うことで有効な「コツ」を選び出し、グループの友と動きを確認して練習をする活動を位置付けた。倒立前転の倒立姿勢の時間に課題をもったN生の「コツ」を再構成していく姿から手だての有効性が見えてきた。	中塚 洋介

第3分科会

・指導者	長野県教育委員会スポーツ課指導主事	出口 哲朗 先生
・司会者	長野市立西部中学校教諭	穂澤 正仁 先生
・記録者	安曇野市立豊科北中学校教諭	永池 祥樹 先生
・世話係	信州大学教育学部附属長野中学校	関谷 北斗 先生
学校名	研究の要旨	
青木 中学校	初めてベースボール型のスポーツを体験する生徒への授業実践	小林 画
北部 中学校	自らが課題をもって夢中になって追究する体育学習とは（3学年・ベースボール型） ～友と関わりながら、運動を学ぶ授業に焦点を当てて～	竹内 隆司
上田第二 中学校	剣道に初めて触れる生徒への指導のあり方	松村 遥
浅科 中学校	運動の楽しさを味わい、仲間とかかわりながら「動けた」「できた」と実感できる 指導はどうあったらよいか ～豊かなスポーツライフを目指して～	近藤 純
豊科北 中学校	リズムダンス（現代的なリズムの音楽にのって） 1学年	永池 祥樹
附属松本 中学校	運動をとらえ直しながら、自分なりの運動とのかかわりを見つけていく保健体育の 学習（2学年・スナッグゴルフ）	上兼 淳
附属長野 中学校	動作の行い方を理解し、自己の体の動きを感じる力を高める指導のあり方 （2学年・シンクロさせよう！集団マット）	関谷 北斗

IV 研究問題と協議内容

【第1分科会】

討議題1：バレーボールにおいて、技能を高めるために個々やチームに応じた課題を持たせるにはどうすればよいか。

1年生の段階で三段攻撃につなげるためにどのような教材の工夫ができるか。

(1) 発表されたこと

- それぞれの技能を高めるためにどう課題を設定すればよいか「課題分析シート」を用いた実践を行った。このシートは課題設定のために有効であったといえる一方で、課題をより明確にするための材料や課題に沿った練習法については改善が必要。（バレーボール・広陵中学校）
- キャッチセットのルールを取り入れることで多くの生徒がスパイクを打てることにつながった。しかし、キャッチによって打球の流れが止まってしまうので、流れの中でスパイクを打てるような教材、ルール、単元の構成を考えたい。（バレーボール・南宮中学校）

(2) 話し合われたこと

- ・課題分析シートは課題が明確化できてよい。チームで課題を判断する手がかり（ゲーム記録をとる、映像でふり返る）があればもっと踏み込んでいける。
- ・三段攻撃にこだわる理由は何か。楽しさはどこにあるのか。チームで一つの攻撃を構成することやメンバーがどう動くか明確にすることに焦点をあてることがよいのではないか。
- ・セッター固定の良さ。1→2→3球目とどこにボールをあげればよいか分かりやすい。ただし、授業ではすべての生徒に様々なポジションの経験をさせたい。

(3) 指導者の先生のご指導

- ・課題を見つけるには、ゴールの姿をイメージする（どんなルールで、どんな技能を、どんな順で身につけていくか、単元の見通しをもつ）ことが大切。メインゲームにつなげていくためのタスクゲームも有効。課題分析シートは考える場としてよいので、学習資料や作戦盤など課題を見つけるもとなるものがあるとさらによい。
- ・ワンバウンドやキャッチありのルールは子どもの実態に合わせて入れていくことも大切。ただ、次の攻撃につながりにくい場面もあるので、バウンドなしでつなげてよいという前提で行えば、2、3年生での授業につながっていきやすい。

討議題2：水泳授業において、友との関わり合いも大切にしつつ運動量を効率的に確保するにはどうすればよいか。

(1) 発表されたこと

- ・背泳ぎにおいて、教師が姿勢や左右のバランスについて良い泳法とつまずきのある泳法を示範することで、子ども達が自分の課題を解決する手がかりにつながった。また、互いの泳ぎを観察し教え合いながら取り組んだことは、励まし合うなどのよい姿につながった。一方で、話し合いの時間が長く運動量の確保が乏しいグループもあった。（水泳・信州新町中学校）

(2) 話し合われたこと

- ・教師が模範泳をし、見てほしいポイントを示せるのはよい。横、縦、水中など様々な方向から観察し合えるとよい。
- ・各学校、背泳ぎを何年生で扱うか。第2学年で扱うところが多い。クロールや平泳ぎに時間を確保せざるを得ない実態もある。
- ・短い距離をしっかり泳ぐ（プールの横方向での練習）も大切。往復で泳げば運動量確保にもつながる。

(3) 指導者の先生のご指導

- ・教師の示範はよいが、良い見本、つまずきのある見本を一気に示しても子ども達には伝わりにくい。この時間はここと焦点化して示すことが必要である。また、教師自身が水中に入ると動きの説明がしにくい場面もあるので、子どもの泳ぎに合わせて解説するのもよい。
- ・中学校の水泳では、4泳法のどれに重点をおくかも大切である。小学校でクロールに多く取り組んでいることを考えれば、中学でのクロールの比重を減らし、平泳ぎや背泳ぎに取り組む時間を確保する方法も考えられる。また、プールを横方向に使った練習や観察は効率的。どこを観察するかポイントを指導した上で見合う、そして泳ぐが繰り返されると運動量も確保できる。

討議題3：リレーにおける仲間との関わりを意識した授業づくりとバトンパスの技能向上について

(1) 発表されたこと

- ・1年生のリレー（陸上競技）において、ねらいを2つ（スピードにのったバトンパスの仕方、個々の走る距離や走順の工夫）に分けて実践を行ったところ、チーム内でよく話し合う姿が見られた。しかし、バトンパス技能を高める点では課題が残った。（陸上・高山中学校）

(2) 話し合われたこと

- ・最初に決めたそれぞれの距離で固定するとバトンパスがうまくいった成果が見えやすい。
- ・ゴーマークについて。バトンはもらい手が重要。渡し手の「ゴー」のタイミングがずれるともらえないので、もらい手が自分の判断でスタートする練習が大切ではないか。
- ・直線を使ったペアリレーもよい。4人1チーム、交代で観察。もらい手も渡し手も学習になる。

(3) 指導者の先生のご指導

- ・リレーはバトンパスでタイムをいかに縮められるかが醍醐味。6人などのチームで合計もいいが、2組リレー（1回だけのバトンパス）でダッシュマークの置き場所、次走者のスタートするタイミング、素早くスピードを上げているかなどを確認しながら練習することもよい。
- ・仲間との関わり合いを考える上で、友だち同士の役割の位置づけや学習課題にそった視点で話し合っているかも大切なポイントとなる。

討議題4：実技での体育理論の実践とその有効性、生涯スポーツへのつながり

(1) 発表されたこと

- ・2年生の体育理論としてスナックゴルフを行ったところ、普段、関わり合いの少ない仲間とも共通の目的に向かってアドバイスし合ったり喜び合ったりするよい姿が見られた。ペアでのオルタネート方式も有効であった。ただ、時数が10時間以上かかったので、より効率的かつ効果的に行う単元構想について追究していきたい。（体育理論・附属松本中学校）

(2) 話し合われたこと

- ・体育理論を実践的に行うのはおもしろい。また、スナックゴルフという題材、オルタネート方式というルールも参考になった。
- ・一部の子としか関われない子が多い中、社会性を身につけるような手立てが工夫されている。

(3) 指導者の先生のご指導

- ・体育理論の新たな実践例。スポーツの楽しさを味わうことが生涯スポーツにつながり、活動の中で友と関わることで社会性を育てていく。10時間という時数をつくり出すことは難しいので、特活や総合とうまく関連づけていけたらよい。また体育理論の授業は、ポスターセッションやインタビューなどの授業形式も考えられる。

長野市立吉田小学校 野口磨莉

【第2分科会】

討議題1：器械運動領域における学習の在り方

(1) 発表されたこと

- ・「コツ」を使いながら、グループで相手の動きや状況に合わせたペアマットを実施し、技能の向上を目指した。「コツ」の種類を、比喻、リズム、擬音の三つに分類し、自己の体の動かし方を理解し、友の感覚と結びつけるために「コツ」を学習シートにまとめた。友と動きを合わせていくことは、自己の体の動きを理解し、技をコントロールすることにつながった。しかし、友の「コツ」が理解できない生徒の姿も見られた。友の感覚と自分の感覚を結びつけるための手立てが新たな課題となった。（マット運動：附属長野中学校）
- ・器械運動領域のアンケートを取り、集計した結果、「痛い・怖い・嫌い」というのが多かった。そのため、ストレッチや基礎ドリルを取り入れ、段階的に色々な体の動かし方を身につけることができるようにした。また、技の練習時には、教師が示範の動きを見せることで、イメージをつけ、どんな技なのか理解できるようにした。グループ活動を活発化させるために、ジグソー法を取り入れ、技能の向上だけでなく、見る視点を大切にして動きの理解もうながした。（マット運動：飯田東中学校）

(2) 話し合われたこと

- ・個人種目の集団化はいい提案であり、できる子もできない子もかわり合いながら運動に親しんでいける環境づくりがよい。小学校で色々な技のコツをたがやして、中学校で色々な技に挑戦しながらコツを見つ

けられるよう、小中連携をしながら学習を行っていくことが大切である。

- ・技能チェックシートを用いることで、技の着目点や課題が明確となり、自己や相手の体の動きを理解することにつながるのではないかと考えられる。
- ・「ポイント」は、技において気をつけるところや大切なところであり、「コツ」はポイントをできるようになるための手立てではないかと感じる。

(3) 指導者の先生からのご指導

- ・動きを言葉で説明するのは難しいことであるが、技ができるようになる過程で子どもは自分の体の動かし方を探っている。その探りの部分を言葉にさせていくことが大切である。
- ・試行錯誤をしながら学習をしていくことが大事だと感じた。初めはできないだろうと思った技が、友とのかかわりからコツを見つけ、できるようになったという経験があると、次は自分から「こうやってみよう」と試行錯誤ができるようになっていく。追究場面で子どもたちが試行錯誤を続けられるようにすることが教師の手立てとなる。
- ・「ポイント」は言葉で説明できる運動の行い方であり、「コツ」は自分の体の動かし方である。コツに関しては自分で動かないとつかめない。他者観察としてのポイントと自己観察としてのコツを組み合わせながら指導したい。
- ・できない友だちの動きを真似ることで、その友だちがどうすればできるようになるか考えようとする子がいる。そのように相手の体の動きを感じ取ろうとする姿を求めることが、自分の感覚と友の感覚を結びつけ、かかわりながら学ぶための手立てとなる。
- ・単元で取り上げる技については、学習指導要領解説の例示を基本にしたい。
- ・子どもたちの「見る」、「考える」、「伝え合う」などの観点からも運動や学習の仕方をやさしくしていく必要がある。動きを見る力、感じる力も技能と一緒に段階的に育てていくことが大切。ICT機器の活用も検討しながら、自分の動きや友の動きをわかりやすく見ることができ、自分の考えを友に伝えられる環境づくりをしていくことが課題である。

討議題2：保健学習における学習の在り方

(1) 発表されたこと

- ・救急法の必要性を感じられるよう、親を救う中学生のビデオを見せた。「スクーマン2」という地域教材を用いて、心肺蘇生法の実践授業を行った。「スクーマン2」は、正しい方法で行わないと音が鳴らないため、どうしたら音が鳴るのか考える授業を展開した。チェックシートを基に、ポイントに沿って活動を行い、3人1組男女混合のグループとして、傷病者の役、助ける役、客観的に評価をする役という役割を決めて活動を行った。チェックシートを各自の判断で評価させたため、評価が甘い部分が出てしまった。
(保健学習：岡谷東部中)

(2) 話し合われたこと

- ・保健の学習は、座学にならないよう、できるだけ実習を取り入れて行うようにしている。胸骨圧迫は、しっかりと押せていないと血液が循環しないため、「スクーマン2」のようにできる・できないがはっきりと判別できる教材は魅力的である。
- ・少人数グループということで、教材が手元にきやすく、実践をする時間が多く取ることができるので、自己評価が高くなる理由が分かる。また、カチッと音が鳴るので、子どもたちでもしっかりと押せているということが分かりやすい。
- ・心肺蘇生法は、命を救う行動なので、なるべく実習を取り入れたい。また、タブレットを使って、実習の様子を撮影し、振り返る活動を行ってもよいと感じる。
- ・タブレットのアプリを使って、1分間に100～120回のペースで胸骨圧迫ができるように測った。救急車がくるのが7～8分かかるので、それを見越して実習を行うことで、命の大切さや命を守る大変さが理解できると感じた。

(3) 指導者の先生からのご指導

- ・先生のねらっていた部分が子どもたちの中に落ちていた。実習を取り入れたことで、知識と技能が一体となって学ばれていた。
- ・保健の指導内容とともに、命の大切さを改めて感じる姿、自分にできることをやろうと前向きにとらえる姿が見られた。道徳性の高まりに正しい知識・技能が加わることで、いざというときに行動にうつせる実践力、生きて働く力となる。
- ・「知識を活用する学習活動」を位置付けていくことが保健学習で強調されている。生徒が問いをもち、どうしていくか学んだことを生かして考える場面を取り入れていくことが大切である。ブレインストーミングや実験、ロールプレイなどの活動を取り入れながら、記憶に残るような保健の授業を行っていきたい。
- ・健康課題を自分事として捉えることから始まり、「つかむ→探る→見つける→決める」という特別活動で提案されている自己決定のプロセスを保健学習に生かしたい。

討議題3：ネット型における学習の在り方

(1) 発表されたこと

- ・ボールをもたないときの動きに着目した。レクリエーションボールやネットの高さを低くするなど技術を緩和し、アタックを打ったり、コースを自在に打ち分けられたりできるようにした。また、アタックのバリエーションを増やすことでレシーブやトスなどの役割分担がゲームの中でできるように授業を展開した。授業の中で、セッターにボールをつなぐ場面を取り上げ、アタックまでつなげるためには、自分のチームにどんなことが必要なのかを考えさせ、練習方法を何パターンか用意し、チームで練習方法を選択しながら行えるようにした。そして、自分たちの動きを客観的に見ることができるよう、ホワイトボードを取り入れた。それにより、チームでレシーブやセッターの立ち位置を考えながら、ポジショニングすることができた。(ネット型：城南中学校)

(2) 話し合われたこと

- ・連係プレー型の教材はよいと思う。その運動の本質にあるものは何かを考え、それに沿ってルールや用具等を緩和していくことは大切であると感じる。
- ・アタックプレルのような下位教材を1年生の早い段階で取り入れている。上達をするポイントは、準備行動やポジショニングだと感じる。1年でアタックプレル、2年でダブルセットバレー、3年でバレーボールのように段階的に行っていきたい。
- ・レシーブに焦点を当てていた授業なので、弾く感覚を早く身に付けさせるための基礎ドリルのようなものがあると、毎回の授業でレシーブの練習を積み重ねることができると思う。
- ・レシーブをセッターに返すことを大切にし、返せば○点、さらに決めると1点というようなセッターエリアを設けることで、どこにボールを集めればいいのかわかりやすくなると思う。

(3) 指導者の先生からのご指導

- ・体育授業では「ネット型」を教えるということを改めて確認したい。ネット型には「連携プレー型」と「攻守一体型」があるが、バレーボールは連携プレー型に属する。自コートでの協同的なプレーによって相手コートに攻撃することが醍醐味である。それを追求しやすいようにゲームを工夫したい。
- ・「型」の特性や魅力を生徒の実態に応じて学ばせていくために、小中の連携とともに、中高の連携も模索していく必要がある。
- ・「ボールを持たないときの動き」は、技能の高い生徒は当たり前のように動いていることが多い。そこに着目し、技能の低い生徒に保障しようとしたことがよい。ボール操作のための準備をしてボールにさわれるようにすることが大切である。上手くできる子や我々大人が当たり前に行っていることの中に、苦手な子に保障していきたい大切な学習内容がある。
- ・球技では、チームで考えた作戦や課題解決の方法について実際にコートに立たせて確認する場面をつくりたい。作戦ボードを活用して話し合っても、コート上での実際の動きとつなげて理解できにくい子がいる。どうすればわかりやすかつかめるか考えていきたい。

討議題4：陸上競技における学習の在り方と保健体育におけるICTの活用について

(1) 発表されたこと

- ・長距離走（3分セიმゴール走）というやさしい教材を提案し、苦しい長距離走の活動を楽しく行うことができるのではと考えた。運動技術の可視化として、目安のグラフを作成し、自分に合ったペースを保って走れるように学習シートを作成した。自分に合ったペース配分を追究し、前半型、中盤型、後半型などのペース配分を見つける姿があった。助言者も個に合った助言をすることができるように、グラフやペース配分などを参考にしながら助言を行った。主観や感覚的にしかとらえることができない走りを可視化したことで、わかりやすくなり、目標をもちながら走ることができた。運動が苦手な生徒のがんばりや場の保障をすることができた。個人種目である長距離走をクラス対抗などの団体形式にすることで、助け合う場やかかわり合う場を多く取り入れられた。（長距離走：伊那中学校）
- ・子どもたちが自ら課題をもって取り組めることと友とのかかわりをもつことをねらいとした。自分の考えを毎回記録するシートの活用や振り返りの充実、タブレットを使って自分の動きを見返すことを手立てとして授業を行った。タブレットの中に、説明入りの示範映像や練習方法を用意し、子どもたちが示範映像をいつでも見ることができるよう工夫をした。また、示範映像と自分の動きを比較し、動きの質を高めようとしたが、自己の走るペースが速くなってはいるものの、フォームや型などに目が向きにくく、どうやって動きの質を高めていくか課題となった。評価も悩み、技能評価が重視されてしまうことがある。（陸上競技：松川中学校）

(2) 話し合われたこと

- ・学年対抗などのクラスマッチ形式にすることで目標ができ、それがモチベーションとなる。
- ・体育理論と重ね合わせながら、グラフや練習時間を設けた。（単元計画13単位）
- ・グラフはこのペースがいいというのがないので、自分に合ったペースで走れるかが大切となる。
- ・最初の基準チェックのときに意図的に落ちるようなタイムにしたため、どの子も1チェック～最高2チェック伸びた。
- ・保健体育は技能教科なので、評価は技能重視になっている部分が多くある。
- ・単元の最初と最後で姿は違うが、できない部分があるので、どうしても評価が低くなってしまふ。できるというのが大前提にきてしまうことがある。
- ・記録があるものは、記録を優先とし、伸びで評価するのは難しい。しかし、関心・意欲・態度や思考力・判断力の面もしっかり評価していきたい。技能が抜群にできる子でも、シートや態度によっては低くなるようにしている。
- ・技の難易度で点数をつけたり、出来栄でも評価したりしている。技能以外でも評価はしているというスタンスで子どもたちにも伝え、評価をしている。
- ・技能以外のすべての観点でまんべんなく評価をするようにしている。

(3) 指導者の先生からのご指導

- ・先生の生徒たちへの情熱的なかかわりの姿勢や言葉がけはとても大切。雰囲気よくなる。クラスマッチ形式で授業を組んでいるので、「単元を貫く学習問題」として追求の軸とし、単元を構想することで、各時間の学習する内容がより明確になる。
- ・「ペースコントロール」のための具体的な走りの技術は何か。そこを子どもたちに確認したい。生徒たちは積極的に声をかけ合っていたが、拠り所になる知識があることで声かけの質が高まる。
- ・タブレットで撮影した自分の動きは感覚移入できるので、課題をつかみやすく、改善のための気づきもてる。まずは、何のために撮影するのか明確にすることで、効果的な活用につなげたい。また、友の動きを見る際は、学習資料としてチェック項目を用意するなど、観点を定めて見られるようにしたい。

中野市立長丘小学校 濱 彰吾

【第三分化会】

討議題1：初めてベースボール型のスポーツを体験する生徒への授業実践

自らが課題をもって夢中になって追究する体育学習とは

(1) 発表されたこと

- ・ベースボール型の競技に初めて触れる生徒に対して、基本的な技能（ボールの握り方、バットの握り方、投動作）に重点を置いた授業展開について。
- ・投動作やバット操作などの技能を向上させるためのドリル練習や写真を用いた掲示資料等の手立てについて。（ベースボール型、青木中学校）
- ・ベースボール型で味わわせる、楽しさを保ちながら系統的に技能を高める教材化をすることについて。
- ・ベースボール型競技の経験がない生徒に対して、ボールを遠くに飛ばしたり遠くへ投げたりする技能を高めることの難しさを感じた。
- ・攻撃側のランナーの判断についての導入を行ったが、生徒は単元を通して守備の配置や役割に注目しており、守備側の戦術学習が中心の授業が展開された。（ベースボール型、北部中学校）

(2) 話し合われたこと

- ・片足立ち投げや真上投げなどの投動作獲得のためのドリル練習が有効だった。しかし、運動経験の少ない生徒に取っては、レベルが高く学習意欲の低下も見られるのではないかと。
- ・高めてきた技能が、ゲームで使われるためにも、ドリル練習とゲームがつながるようなルールや場の工夫が必要である。
- ・掲示資料がとても見やすく、生徒の学びのよりどころになっている。単元を通して掲示をするとより効果的だった。
- ・生徒の技能によって墨間を設定したり、道具を工夫したりすることにより、守備時に必要な判断や戦術の部分への学習に焦点を当てることができる。
- ・Wブレイクベースボールはティーバッティングで攻撃が開始されるが、より技能の高まりを期待するときにはトスバッティングにしたり、ピッチャーを配置したりすると、より競技性が増し、面白い教材になる。

(3) 指導者のご指導

- ・教材や教具の工夫を行うことが、ベースボール型に限らず必要になってくる。良い教材をそのまま使うことでは、良い授業につながるとは言えない。生徒の実態や施設の状況によって教材を工夫して、子どもが学習しやすい環境を整えながら、その競技の特性を味わわせることが必要になる。
- ・子ども達が必要感を持って取り組める、ドリル練習を単元に位置づけたい。ゲームの一場面を切り取った練習を行うと、技能を高めながらゲームのレベルを上げる事ができる。
- ・投げる能力は全国的に見ても、低下傾向にある。長野県は全国的に見ても平均以上であるが、低下傾向にある。投げる能力を授業で高めていきたい。

討議題2：剣道に初めて触れる生徒への指導のあり方

運動の楽しさを味わい、仲間とかかわりながら「動けた」「できた」と実感できる指導はどうあったらよいか

(1) 発表されたこと

- ・「学びの共同体」という学習形態に取り組みながら、生徒同士の聞き合う関係や生徒の実態に合わせることを大切に教材の工夫。
- ・一人ひとりがアイデアを持ち、友達と踊り合いながらアイデアを共有したり深めたりできる授業展開について（リズムダンス、豊科北中学校）
- ・マット運動において動きの映像を基に、技の「コツ」をグループでの話し合いを通して言語化する活動を位置づけることで、技の完成度やグループでの演技をよりよくすることにつながった。
- ・感覚的な動きのコツを実際の動作の行い方に結びつけていく手立てや、「わかる」と「できる」が結びつく手立てを引き続き究明していきたい。（マット運動、附属長野中学校）

(2) 話し合われたこと

- ・コツを言語化した場合、個々に表現が違うため、生徒に取っては有効では無い場合もある。個々の生徒に取って感覚的な部分を共有することの難しさを感じる。
- ・技の難易度や演技の構成が全ての生徒に取って満足のいくものだったのか。演技の幅や技の種類がもう少しあると、技能の高い生徒にとってはより達成感を感じることができたのではないか。
- ・心身を解放することがダンス学習には必要であり、先生が生徒と一緒に踊ることが心身の解放を生み出すきっかけとなる。
- ・規定演技を単元前半で練習したことで、学習させたかった即興的な動きや独創的な動きが生まれにくくなり、学習が停滞する時があった。即興的に踊るための手立てやダンスバトルの行い方の工夫などがあるとよかった。

(3) 指導者のご指導

- ・最近の子ども達はダンスを身近に感じており、興味や関心が高まっている。
- ・狙いに対してどのような課題を提示するかを、大切にしながら授業を展開したい。
- ・ダンスバトルでは、即興的に相手のダンスを真似るなどのルールを付け加えると、楽しみながら新しい動きを習得することにつながっていく。色々な動きを提示して踊ってみるとよい。
- ・自由度をどこまで上げていくのかは、生徒の実態に応じて対応できるように幅を持たせて、準備する必要がある。
- ・器械運動は達成型というイメージから、シンクロマットを追究することによって、技の個人追究だけではなく仲間との関わりを通じた学習や表現力を養うための教材としてとらえることができる。
- ・感覚的な部分を比喩や擬音やリズムを使って表現させ授業で共有させたことによって、言語活動が充実した。体育の表現力という観点が次期学習指導要領を見据えた学習につながっている。

討議題3：運動をとらえ直しながら、自分なりの運動とのかかわりを見つけていく保健体育の学習 動作の行い方を理解し、自己の体の動きを感じる力を高める指導のあり方

(1) 発表されたこと

- ・どのようにすればすきを生み出すことができるかを、単元を通して学習していった。剣さばきではなく足さばきに注目させることで、手と足が連動するタイミングをつかみやすくなった。
- ・自分に合った攻め方を考えることや相手のすきを生み出すことを通して1対1のかげひきによる剣道の楽しさを味わせたかった。(剣道、上田第二中学校、浅科中学校)
- ・実際にスナッグゴルフを体育館で実施した。
- ・体育理論の学習内容の中の運動やスポーツが社会性の発達に及ぼす効果という部分に焦点を当て、体育理論とスナッグゴルフを合体させた単元を構想した。
- ・スナッグゴルフを通して、友との関わり方が変わったり、運動に対する意欲が向上したりするなどの変化が見られた。(ターゲット型、附属松本中学校)

(2) 話し合われたこと

- ・防具の着脱や礼法の学習などに時間がかかり、体を動かす時間を確保するのが難しい。教具の工夫や省略しても良い部分を教科内で統一して、何を学ばせたいかを明確にした上で単元を構想したい。
- ・試合で打ち込みにいけない生徒に対しては手数を増やすという指導ではなく、いつ打てばよいのか、相手の状態がどのような時に打つべきなのかを指導していくと自信をもって打ち込めるようになる。
- ・体育理論を年間で12時間の授業時数を確保するためには、教科横断的な学習として道徳と組み合わせて授業を展開することが必要になる。
- ・体育理論と絡めながら実技を組み込んだ授業展開は今までに無かった発想だと感じる。人間関係を作るという観点でも有効に働いているので、年度初めの体育の導入として実践していくという可能性も感じられる。

(3) 指導者のご指導

- ・全国的に武道の授業が嫌いな生徒が多い。子どもの思考や願いが生かされる授業よりも教師主導で形式的

な内容を教え込む授業になりがちであり、楽しいと感じられる場面が少ないことが背景にある。

- ・礼法の意味や背景を伝える授業を実施して欲しい。武道が必修化された背景や狙いから、日本の文化を学べる授業でありたい。
- ・長野県では武道で相撲の学習を行う地域もある。相撲は柔道や剣道と比べて審判がしやすかったり、用具も少なく済んだりする。武道で相撲の学習も考えていきたい。
- ・バランス良く子ども達を育てるためには、教科横断的な学習が必要になってくる。
- ・2020年に向けてオリンピック・パラリンピックについての教育を推進いきたい。体育理論での学習内容を充実させていきたい。

安曇野市立豊科北中学校 永池 祥樹

V 本年度の反省と来年度の方向

1 本年度の反省

項 目	内 容
○本年度の研究テーマについて	<ul style="list-style-type: none"> ・よい（多数） ・「楽しさ」や「喜び」を味わうことはとても大切だと思うし、それが「できた」につながるというと思っています。なので、この二つの言葉を大切にしてほしい。
○研究の主な内容と研究の成果について	<ul style="list-style-type: none"> ・本年度は、ポイントを提示する際に子どもたちの中に入るようにしていくことを大切にしながら授業を行いました。まだまだ改善が必要でした。 ・関わり合うことで、自ら進んで運動することに結びついていくように思いました。 ・課題分析シートを用いて、チームの課題を明確にしようと試みたが、8割の生徒はずれた課題設定になってしまった。
○研究の方法や経過について	<ul style="list-style-type: none"> ・いくつかのポイントは低学年には難しいので、一つあるいは二つにしばっていくことが大切だと気付きました。 ・どの方法も試したくなるものばかりで勉強になった。 ・各校の取り組みの仕方は違うと思うが、同じ方向に進んでいけばよいと思います。 ・コツによって運動ができるようになっていくと思いました。 ・タブレット教材の導入等子どもの学習活動の観察。学習カードの記録等の活用。
○研究会当日の運営について	<ul style="list-style-type: none"> ・よい。 ・一分科会あたりの人数が減り、じっくり協議でき、丁寧に扱っていただきとても良いと思う。 ・自由に気兼ねなく話せる雰囲気がありがたかった。来年もこういう形で実施してほしい。 ・初めての参加だったが、想像以上にアットホームな感じで、また参加したいという気持ちになりました。ありがとうございました。 ・初めての参加だったが、勉強になった。 ・各校の実践から学ぶことが多くありました。 ・話しやすい雰囲気だった。 ・当日持参ありがたい。
○研究集録等の Web ページ掲載について	<ul style="list-style-type: none"> ・来年度もお願いしたい。
○本年度運営全般について	<ul style="list-style-type: none"> ・事務局、運営の負担が減るように工夫して頂けたらと思います。 ・いろいろが丁寧でよかった。

2 来年度の方向

○来年度の研究テーマ	<ul style="list-style-type: none"> ・評価はとても大切なので、これからも継続していきたいです。 ・“関わり”の部分を大切にしていきたい。 ・教材化については引き続きがよい。 ・よいと思う。 ・継続でよい。 ・生徒同士のかかわりの中で技能の伸びが見られる授業のあり方。 ・教材化の工夫は来年度も引き続き必要だと思う。
○来年度の研究の趣旨	<ul style="list-style-type: none"> ・教材化と評価は体育だけでなく保健分野においても重要なことであると思うので、保健体育としてとりこんでいきたい。 ・生徒同士のかかわりの中で本当の活発的な授業になるのではないかな。 ・生徒同士の技能に関するかかわりを多くもたせる。 ・今年度と同様でよい。
○来年度の研究の方法	<ul style="list-style-type: none"> ・ICTを活用していきながら、技能だけでなく思考判断にも重点を置きながらやっていきたい。 ・技能ポイントを絞り、そのポイントに合ったアドバイス活動。
○その他、改善したい点	<ul style="list-style-type: none"> ・レポートを提出しなければいけないことが、参加に積極的になれない理由になっている。 ・レポートの形式をもう少し簡単なものにしてもらえるとありがたい。 ・初任者研修の一つになっているので、うまく活用したい。

VI あとがき

ひだまりにぬくもりを感じ、枯葉が降り積もる11月18日、長野県中学校連合教科研究会が、県下各地からお集まりいただいた先生方の熱心な発表と討議によりまして、大きな成果をあげて終わることができました。研究会に際し、レポートの作成、日頃からの実践等、本当にありがとうございました。

つきましては、生徒のためにさらに実践を重ね、お互いの励みとすることができればと思います。終日の研究会におきましては、熱心にかつ丁寧にご指導いただきました長野県教育委員会スポーツ課指導主事の出口哲朗先生、長野県教育委員会指導主事の清水直人先生、齋藤和久先生に心から感謝申し上げます。また、綿密な司会計画を立てられ、討議を深めていただいた司会の井浦徹先生、堀込浩志先生、穂澤正仁先生、さらには、当日の各分科会の記録および研究集録の執筆にご尽力いただいた記録者の野口磨莉先生、濱彰吾先生、永池祥樹先生にも深く感謝申し上げます。

じっくりと生徒の姿を語り、自分自身の実践を振り返りながら討議できたのもみなさまのおかげであります。

来年度の研究会には、さらに多くの先生方の参加をいただき、有意義な研究会になることと、皆様には体をご自愛頂きまして、ますます日々の授業実践に励むことを願ひまして、まとめとさせていただきます。

委員長 中塚 洋介
副委員長 有賀 浩之